

震災から1年、

あの日からの学校と

これからの生徒たち

岩手県立宮古高校 **吉田達行**・宮城県気仙沼高校 **佐藤忠司**

東日本大震災発生から1年を迎えようとする2012年3月10日、甚大な被害を受けた東北沿岸部の公立高校教師が、震災以降の生徒の様子、そしてこれからの指導について語り合った。



**日常のありがたさを
思い知らされた1年**

佐藤 震災から明日でちょうど1年……テレビや新聞では盛んに1年前の様子を振り返る報道をしています。1年前、津波で破壊された町を見た時は、涙が止まりませんでした。こんなことが起こってしまっただなんて、実のところ私は、今でも信じられないんです。

吉田 メディアでは、震災直後の映像がよく取り上げられていますが、正直、私はそうしたものを見る気がしないので

多くの人に支えられて初めて保たれていたものだったのだと生徒は気付いたはず
です。



**生徒は困難の中で
最善を尽くした**

吉田 今日は11年度の卒業アルバムを持つてきたのですが……生徒の表情は明るいですよ。普通の高校生です。本校は12年度入試で、例年以上の進学実績を上げました。多くの生徒はいずれ地元に戻って、地域の復興・発展に尽力したいと考えるようになりました。だから、大学や学部を志望する理由も明確で、芯があります。思いを自分の言葉で語る事が出来たから、推薦やAO入試でも良い結果が出たのでしょう。

佐藤 ただ私たちは、例年以上に生徒を不合格にはさせられないというプレッシャーを感じていました。大変な思いをしてきた生徒を、更に不合格という状況に追い込みたくない。正直、プレッシャーで眠れませんでした。

吉田 合格の知らせを聞くと、生徒本人はもちろん、教師も元氣になりました。合格がいかに人に力を与えてくれるかを実感しました。

佐藤 合格は、人に、未来を生きる力、意欲を与えてくれますから。

吉田 部活動でも生徒たちは頑張りました。

た。テニスコートやグラウンドが使えなくなるなど大変でしたが、どの生徒も自分で練習時間、場所を工夫していました。

「震災を言い訳にはしたくない」という気持ちで、全員が持つていたと思います。その結果、自己ベストタイムを更新する生徒、県内の新人戦で優秀な成績を収める生徒も多くなりました。

佐藤 被害を受け、設備も十分ではない練習場で必死に練習し、夜はそのまま残って勉強に取り組み部もありました。そんな部からは、何人も志望大に合格する生徒が出ました。つらい現実を前にして、よく頑張っていました。大したものだと思います。



**生徒の持つ強さ、力、
優しさを実感した**

吉田 全国から、さまざまな形で支援が寄せられました。私たちも生徒も、いただいた厚情に対して心から感謝しています。そして、いつかそのご恩を返したいと思っています。

佐藤 支援していただけるのはありがたいけれども、いつまでも他者の厚意に甘えるばかりではいけない。そういう気持ちで、どの生徒にもあります。早く自立しないといけないと思っているはずですよ。子どもはとても純粋です。だけど大人は……。避難所では、生徒たちは自分



さとう・ただし

宮城県気仙沼向洋高校、宮城県県が浦高校などを経て、2005年度より気仙沼高校に勤務。進路指導部長を務める。担当教科は地理。

よしだ・たつゆき

岩手県立盛岡第四高校などを経て、2005年度より宮古高校に勤務。進路指導主事。12年度より岩手県立盛岡第一高校勤務。担当教科は英語。

の食料を小さな子どもに分け、防寒用に床に敷くための新聞紙を探しに行っていました。しかし大人の中には「なぜ食べ物がおにぎりしかないのか」「どうして均等に食料を分けられないのか」「この寒い中、新聞紙しか敷くものはないのか」と文句を言う人もいました。

吉田 被災後の行動を見て、大人には強い人もいれば弱い人もいるという単純なことがよく分かりました。しかし、生徒は誰もが立派でした。集団の中で自制心を持ち、前向きに、そして優しい心を持って行動できていました。他の人のために力を尽くそうという価値観が、行事や部活動といった学校の日常の中で育まれていくからなのでしょう。

佐藤 大人は年をとるにつれて自分の周りにバリアーを張って、他の人を近づけなくしてしまうことがあります。しかし生徒は、人をつなぐことが出来ていました。大人やお年寄りは、生徒を見て自分子どもや孫の姿を思い出し、言葉にも耳を傾けます。だから大人同士をつなげられる。これは、コミュニティーに対する素晴らしい貢献だと思います。人と人とのつながりが弱くなってしまった現代社会において、生徒は人と人をつなぎ直す優しさ、力を秘めています。私たち

教師にとっては、そのことを実感した1年でした。



感謝の心が 生徒を強く育てている

吉田 震災から1年が経ち、今いっそう強く思うのは、生徒の言葉を大切に

教師でありたいということです。生徒は、大人が思っている以上に大事なことを理解していました。今は大人の社会が疲弊し、行き詰まっています。だからこそなおさら、生徒の発する言葉、感じている思いを大人が、教師がきちんと受け止めなければいけないのです。生徒は、受け止める価値のある言葉を発しています。

3月、生徒たちは自分たちを支えてくれた人々たちへの感謝の言葉と共に、「1人でも多くの人を元気に出来る人になりたい」と言って卒業していきました。大人は抱えているものを見て、それを言葉にすることをためらいます。高校生の真つすぐな言葉は、常に未来を見えています。

佐藤 「これほどの力があつたのか」と教師が驚くほど、生徒は強いです。震災の事実を受け止め、自立に向かおうとする生徒に共通しているのは、「被災地の生徒だから仕方がない」「被災して大変だから大目に見てやるう」と言われた

くないという気持ちです。未来をつくるのはそうした生徒たちなのですから、私は教師として、彼らの手助けがしたいと思います。生徒が、自分はどう社会に貢献できるかを考え、どんな社会人になりたいかを考えるためには、自分の個性と向き合う必要があります。だから私は、教師は生徒の個性を消してしまつてはいけないと思うのです。

吉田 生徒たちから、前へ進むもうとする強い意志、生きる意地のようなものを感じます。教師は、勉強場の確保に苦勞する生徒のために、当然のように休日も返上して学校にきました。生徒はそういう教師の姿を見て、教師の思いに応えたいと思ってくれたのでしょう。教師と生徒との信頼関係は、震災後、更に強く結ばれています。卒業式では何人も生徒が「居心地の良い学校だった」と言ってくれました。生徒がそういう思いを抱いていたから、例年以上の進学実績が出たのだと思います。優しいけれども意地があり、感謝しているからこそ負けたくない。生徒の強さの源は、感謝にあります。自分1人のためだけでは、頑張りにも限界がありますが、誰かのためならもっと頑張れる。そういう強さが多くの生徒の中に育っていると思います。

*プロフィールは2012年3月時点のものです